

明代の文人と西湖を味わう——高濂著『四時幽賞』試訳(上)——

湯谷祐三

解題

一、西湖関係文献の変容——西湖を楽しむ心——

杭州西湖とその周辺は、湖水とそれを取り囲む山川の景観が特に風光明媚であること、また江南交通の要衝であり、南宋の首都臨安が西湖の東に隣接して置かれたことなどの様々な理由から、中国における歴史・政治・宗教・文学の一大淵藪地となった。西湖に関する文献資料もおびただしい数にのぼり、それらは清代光緒年間に『西湖集覽』（錢塘丁氏校刊本一六冊）や『武林掌故叢編』（錢塘丁氏嘉惠堂刊本二〇八冊）といった大部な叢書に蒐集され、近年では『西湖文献叢書』（一九九九年、上海古籍出版社）なども刊行されている。

西湖に関する文献のうち、単発の詩などを除いて、まとまったものとしては宋代の『咸淳臨安志』全百卷や『武林旧事』全十卷などが古く、元代の劉一清編『錢塘遺事』全十卷などを経て、明代になると更に多くの西湖に関する著

述が成されるようになる。嘉靖二十六年(一五四七)自序の田汝成編『西湖遊覧志』全二十四卷、及び同編『西湖遊覧志余』全二十六卷などは、明代の西湖文献の中でも代表的なものと見えよう(以下『遊覧志』・『志余』と略称)。

南宋後期の潜説友編『咸淳臨安志』全百卷は、当然ながら製作主体である南宋王朝の偉容を誇示することを目的とするため、その叙述は内裏から始まり、官庁や歴代皇帝らの記述が延々と続く。ここでは、皇帝や官衙及びその舞台である都市臨安の叙述が主体であって、西湖とその周辺の文化的事象は、それに従属するものとして扱われている。これとは対照的に、『遊覧志』では、序文に続いて、断桥・孤山という風雅・文事の舞台から叙述が開始することからわかるように、記述の主要な目的は、西湖に関する歴史的・文化的事象の列記・紹介であって、宋代の故宮などもそうした西湖を形成する風物の中の一つとして扱われる。

その記述の内容は、風物や建物の概況、沿革、縁起、逸話などを散文で記すと共に、それにまつわる歴代の詩文などを並記するのが特徴である。この散文韻文並記の形式によって、『遊覧志』をひらく人は、居ながらにして西湖をめぐり、それぞれの名勝の知識を得ると共に、歴代詩人の佳什に導かれて、西湖を楽しむことができるのである。この、西湖そのものを楽しむという姿勢が、宋代の西湖関係文献と較べて、明代の西湖文献にはより強く現れた性格であると筆者は考える。

二、張岱の『西湖夢尋』——概説と私感——

田汝成の『遊覧志』が刊行されて以降、西湖に関して何らかの著述を成そうとするものは、多かれ少なかれこれを意識していたと思われる。その実例の一つとして、明末万曆三十九年(一六一一)自序の張岱編『西湖夢尋』全五巻があげられる(以下『夢尋』)。

張岱の『夢尋』は、『遊覧志』の記述を多く引用していることがわかっており、そのボリュームの多寡からもわかるように、張岱は、『遊覧志』全二十四巻に掲載された多くの西湖の景勝のうちでも、主要なもののみを選択して全五巻に短くまとめている。よって、『夢尋』は『遊覧志』の一種のダイジェスト版のようなものであり、より簡便に西湖の楽しみを概観できるといえる。ちょうど現代のガイドブックのような利点がある。

ただし、各記事の内容について、『夢尋』は『遊覧志』の単なる抄出ではない。『遊覧志』の記事に基づいて、各名勝の概観を示したあとで、張岱自身の感慨、思い出などが記される。この部分の内容は、その名勝に関係する歴史的人物についての張岱が撰んだ逸話や、張岱の個人的褒貶、あるいはその名勝において張岱が直接見聞した記憶などである。そして、ここにこそ『夢尋』を読む楽しさがある。

張岱が紹興の富豪であり、西湖を初めとする江南の豪奢を極めた人物であることは、彼の随筆『陶庵夢憶』（岩波文庫所収）からもうかがい知ることができる。しかし、張岱が単なる遊治郎の好事家でなかったことは、明朝の瓦解にあたり、節を曲げて清に仕えることなく、山に逃れて晩年の大著『石匱書』の編纂に専念したことからわかる。この全二百二十巻に及ぶ巨編は、紀伝体の明史であり、まさに張岱の「史記」と言えよう。こうした歴史と政治に深い関心を持つ張岱の性格が、『夢尋』の独自記事には濃厚に反映されている。

岳飛を死に追いやった秦檜や、杭州の寺院や遺跡を冒瀆した元僧楊連真伽などの所業に対しては口を極めて憤る一方で、岳飛や于謙といった身を捨てて国のために尽くした人物については賛辞を惜しまない。また、文芸の尊重はつねに彼の思考の底流に流れており、なかならず、蘇東坡の逸話・遺跡については、こここで言及される。賈似道のような、通常批判的に語られることの多い人物であっても、その文芸理解の高さによって、これを弁護するというような場面もある。

このように見てみると、『夢尋』の魅力は、『遊覧志』と較べてより簡便に西湖の名勝を概観できるといふことだ

けではなく、一代の文人張岱の癖のある独特な眼差しによって叙述された、西湖にまつわる「政」と「史」についての私感が、読むものをしていっそう深く西湖の景観に引き入れていると言えよう。

三、高濂の『四時幽賞』の特異性

本稿で取り上げる高濂の『四時幽賞』（以下『幽賞』）について述べる前に、田汝成の『遊覧志』や張岱の『夢尋』を取り上げたのは、『幽賞』がこれらとはまったく正反対の内容・性格を持つからである。その成立時期は万暦八年（一五八〇）で、『遊覧志』よりも三十三年遅れ、『夢尋』よりも三十一年早い。その内容は以下に述べるようにまったく異なっている。

前述のように、『遊覧志』は各景勝地の歴史・由来などのデータを詳細に述べるのであるが、『幽賞』にはそうした記述はまったくない。景勝にまつわる逸話や人物について、あるいは、その寺院や建物がいつ頃創建され、いつ頃焼けて、またいつ再建されたかなどについて述べられることはない。つまり、高濂には、西湖についての概説、最低限の予備知識を読者に提供するなどという意図はまったくなかったと見てよい。『遊覧志』に見られ、『夢尋』にも継承されている、事実・知識を記録しようとする性格は、『幽賞』にはないのである。

『幽賞』は、その題名からもわかるように、四時（四季）おりおりの西湖の楽しみを鑑賞するというもので、春夏秋冬それぞれ十二箇条の短文、合計四十八条から成る。そしてその西湖の楽しみとは、すべて高濂自身が実際に体験し、味わった上で感じた楽しみであって、何かを引き写したものは基本的にない。彼自身、蘇堤の跨虹橋のほとりに山満楼という別荘を持っており、ここを拠点として西湖やその周辺の景勝を隅々まで見てまわり知覚した事柄や印象が綴られている。

『幽賞』はこのように高濂自身の体験・印象・感想をもとにした楽しみを述べるが、しかし、それは『夢尋』で張岱が綴ったような私感とは、異なった性格であることに注意したい。西湖近辺に別荘を持ち、あちこち見てまわったという点では、張岱も高濂と同様であるが、張岱は第一に、景勝にまつわる事件や人物、そしてそれらが織りなしてきた歴史と政治に関心があり、それに対する自己の評価を積極的に好んで述べる。

これに対して『幽賞』は、そうした歴史や政治に関する事柄を取り上げることが全くなく、ましてそれらへの自己の賛辞や批判を述べることもない。さらに、これも『遊覧志』に見られ、『夢尋』に継承されていた、各景勝を題材とした過去の詩人の作品を列挙する手法も、『幽賞』には見られない。本文中への自然な引用を除いて、自作も含め韻文の並記はまったく見られず、散文のみである。以上のように、『幽賞』は、『遊覧志』や『夢尋』とはまったく対照的な様相を呈しているのである。

四、高濂の「幽賞」の意味―西湖の内外と心の内外―

西湖にまつわる歴史にも政治にも、そして過去の詩人の作品にも関心がないとすれば、高濂はいったい何に関心があるのか。それは一言で言えば、「自分自身と西湖自身」ということであり、そのことは題名の「幽賞」の意味とも密接に関わっていると筆者は考える。

西湖の景勝に立つ高濂は、目の前に広がる景観や景物を、まず第一に自分自身の視覚・聴覚、そして味覚などの感覚を総動員して味わい、その結果を言葉で記述する。だから『幽賞』の本文には物事を形容する語彙が頻出することになる。物事を形容するその主体はあくまでも自分自身の、いわば素の心であって、過去の詩人といった、他者のフィルターを借りて景観に対することは、いくつかの事例を除いて、原則としてやらない。そして、見る主体

が素の心であるとすれば、高濂に見られる客体である西湖もまた、素の西湖でなければならぬのであって、西湖にまつわる歴史や政治的事柄には、高濂はほとんど興味を示さない。

つまり、高濂の指向は常に内部に向かっていると見える。歴代の詩人が作った西湖を題材とする詩文などは、どれほどそれが優れたものであろうと、所詮は自分の心の外部にまとりついた他者に過ぎず、自分の心の真実ではない。同様に、西湖やその周辺を舞台として積み重ねられてきた歴史や政治的事柄もまた、西湖の外部にまとりついた他者であって、西湖の真実ではないのである。

高濂の言う「幽賞」の意味がここにある。「幽」とは、この場合「奥深いもの」ということであろう。高濂は自身の心の奥深いところで、西湖の奥深い内部の真実を直観し、それを記述することを目的とした。それが成就したとき、おそらく彼の心と西湖とは一体になっていったと思われる。

高濂がその序文で、「いつでも人が景観を心静かに味わえるということではない」というのは、他者のフィルターを通して西湖の外面を眺めているものは、いつまでたってもその真実を知ることとはできないという意味であろうし、また、「心で理解すれば、素晴らしい景観の本当の妙趣を得ることができる」のであるから、実際に屋外で西湖を愛でるだけではなく、「夢の中の思いや、心だけが飛んで行って楽しむこと」も、高濂にとっては重要な鑑賞法となる。

高濂は名著『遵生八箋』の編著者である。『遵生八箋』は1清修妙論箋・2四時調撰箋・3起居安樂箋・4延年却病箋・5燕閑清賞箋・6飲饌服食箋・7靈秘丹葉箋・8塵外遐拳箋の八箋から成り、自序の言葉を借りれば、著述の目的は我が身の「明哲保身、息心養性」ということになる。『幽賞』も実はその2四時調撰箋に含まれている。『遵生八箋』には、同じく明代の文震亨編『長物志』や屠隆編（仮託カ）『考槃余事』と同様に、器物や食物、薬品から建物・園林などにいたるあらゆる文物が列挙されている。従来こうした編者は、明代の爛熟した文化が生んだ、一種「玩物喪志」的な著作と見られることもあるが、今回『幽賞』の記述を通して、高濂の「志」とは、すぐれた

文物を身の回りに収集して喜ぶというような外面的なことではなく、そうした文物の真実を心の真実で理解することによって、心と文物との一体化を目指し、その結果自身の心性そのものが高められ養われることを目指すというものであることがわかった。そうした観点から、明代の文人高濂に導かれて西湖の景観を味わいたいと思う。なお、『幽賞』には寛文八年の和刻本があることから、江戸期の日本人の西湖に対する見方に大きな影響を与えた可能性があり、これについては次号で述べたい。

底本について

翻訳にあたっては、寛文八年の和刻本を底本とし、『四時幽賞録他十種』（底本は「清光緒甲午丁氏刊本」とある。上海古籍出版社）所収の活字本を用意して、交互に参照した。

両者は、和刻本の誤刻と思われる箇所を除き、本文に大差はないものの、冒頭の自序が異なることから、厳密には別の系統であろう。和刻本の序文には年紀はないが、その文章は『遵生八箋』（万曆十九年序刊）所収のものと一致することから、和刻本は『遵生八箋』から抄出したものと考えられるため、『遵生八箋』（一九九二年、巴蜀書社）も参照した。一方、活字本の自序には「万曆庚辰」、すなわち万曆八年（一五八〇）の年紀があることから、『遵生八箋』に先だって刊行されていたものの系統と思われる。明版の『四時幽賞』としては、静嘉堂文庫所蔵の明王道焜編『雪堂韻史』刊本八冊（守先閣旧蔵本、三六函一架）所収本がある由だが筆者未見。

目次

【春時幽賞十二条】

1 孤山月下看梅花 2 八卦田看菜花 3 虎跑泉試新茶 4 保叔塔看暁山 5 西溪啖煨笋 6 登東城望桑麦 7 三塔基看春

草 8 初陽台望春樹 9 山瀉樓觀 10 蘇堤看桃花 11 西冷橋玩落花 12 天然閣上看雨

【夏時幽賞十二条】

13 蘇堤看新緑 14 東郊玩蚕山 15 三生石談月 16 飛來洞避暑 17 壓堤橋夜宿 18 湖心亭採蓴 19 湖晴視水面流虹 20 山晚
聽輕雷斷雨 21 乘露剖蓮雪藕 22 空亭坐月鳴琴 23 觀湖上風雨欲來 24 歩山徑野花幽鳥

訳文

四時幽賞

わたくし高濂はこう考える。世を逃れて山中に住むものの性癖は、四季の景色を心静かに味わうことにある。その興趣こそ真実のものである。そこで、この杭州における、いくつかの事柄を挙げて記述し、これに同調しようと思ふ。

ただし、心静かに味わうべき素晴らしい境涯は天下にあふれていて、きわめつくすことはできない。残念ながら、これを好む者の心が真実の境地にないのでは、どうしようもない。だから、いつでも人が景観を心静かに味わえるということではない。素晴らしい景観が人を拒絶しているのではないのだ。

わたしたちは、おおらかで物事にこだわらない気持ちをもって、塵間を超越し俗界を脱出する。はるかに物事を見通す眼力をそなえて景色を観覧し、心で理解すれば、素晴らしい景観の本当の妙趣を得ることが出来る。さらに、景観を楽しむことに関しては、何も禁じられることはなく、これをおこなって尽きることもない。簡単に手に入り、一日中鑑賞できるのだ。(そのうえ)夢の中の思いや、心だけが飛んで行って楽しむことも、わたしは永遠に忘れることはできない。果たしてこれにまさる楽しみがあるか。まだすべてを尽くすことはできていない。これからはほんのいくつかを見てみよう。

春時幽賞十二条

1 孤山で月の下に梅の花を見る。(孤山月下看梅花)¹

孤山の旧址には、逋老人が梅を三百六十株植えたが、すでに枯れてしまった。これを継いで植えたものも、今では数が少なくなつてほとんど残っていない。孫中貴が元の数を補つて植えた。

春の初めには美しい梅樹が重なり合い、白梅の花が入り交じる。玉の台に寄りかかつて眺めれば、ほのかにほおつとして、まるで(仙人の住む)玄圃や、(梅の名所の)羅浮山に座っているかのようなのである。もし、たそがれの月光の下に酒樽を携えて高吟して楽しまなければ、闇に漂う梅の香りや「疎影横斜」の興趣について、本当の有様を見ることができようか。

2 八卦田に菜の花を見る。(八卦田看菜花)²

宋代の籍田は、八卦の爻こうをもつて溝とあぜをつくり、丸く配置して造形したものだ。今でもなお残っている。春の時には、菜の花がむらがり開く。天真高嶺(玉皇山)から遠望すれば、黄金(の菜の花)が土手を作り、碧玉(の稲の新芽)が畑をなし、(風が吹くとまるで)長江の波のようにゆれ動き、おぼろに河図洛書の中から陰陽の爻がきたどられるようである。湖面と空は広々として、目を凝らせば、遙かにさらに形象のほかの想念があふれている。

3 虎跑泉にて新茶を試みる。(虎跑泉試新茶)³

西湖の泉水は虎跑泉の水をもって最上とする。二つの山のお茶は龍井をもつて上質とする。穀雨の前に茶を摘んで少しあぶる。そして、虎跑泉の水を沸騰させて煮出せば香りもきよらかで、味わいもさっぱりとしており、涼し

げで詩心にしみわたる。春が来るたびに山の中に隠棲し、新茶に酔いしれて、ひと月は過ごすべきなのだ。

一〇

4 保叔塔から暁の山を見る。(保叔塔看暁山)⁴

みどりの山は湖をめぐり、その景観は様々であるが、ただ春の朝の光景がもとも素晴らしい。あるいは霧が山腹にかかり、あるいは霞が木々の梢にまとわりつく。そのうちにもやがゆるらゆるして晴れてゆき、(山が太陽の光で)輝き始める。あるいは、山の雲気がさかんに立ちあがり、曙の色でおおいかくす。峯はさしのぼる朝日に照らされて、自然の清らかな美しさが高々とあらわれ、風は溪谷からわきあがる雲を散らし、林の中のさつきはさわやかに咲いている。

さらに遙かな峯がやわらかな藍色に刷かれ、遠い山の頂きはたちまちしっとりとした緑色になるのが見える。幻のように変化する天象が現れ、少しの間に様々な形を現す。この光景はちょうど夢の真つ最中の時間で、恐らく町の人々は容易に知ることはできないのであろう。

5 西溪楼で焼いた竹の子を食べる。(西溪啖煨笋)⁵

西溪には竹林がもとも多く、竹の子の生産がきわめて盛んである。ただし、竹の子の味わいの美味なることの本当のところを会得するのはまれである。

春に竹の子が伸びて肥えている最中に、竹の根もとの葉をあつめて埋み火で焼く。火が通ったら刃物で切って皮を剥いで食べる。竹林での清らかな味わいは、そのうまさでこれに比べられるものはない。世間の俗な心持ちでは、どうしてこの本当の味わいを知ることができようか。

6 東城に登って桑と麦を眺める。(登東城望桑麦)⁶

桑と麦が盛んに作られているところとしては、東の郊外がもっとも広い。田の畝が万頃と続き、一望して限りがない。春の時には桑の林と麦の畑が高く低く競いのびて、風に揺れて青い波が幾重にも重なり、雨が通り過ぎてみどりの雲がまとわりつく。

雉が春の陽光に鳴き、鳩は朝の雨に鳴く。竹のまがきのある茅葺きの家には、紅の桃の花や白い李の花が咲き乱れ、紫燕や黄鶯が飛び交って、目に映る色彩は豊かである。村の家の閑居の味わいが増すと、人に俗っぽい色どりを忘れさせる。

7 三塔のもとに春の草を見る。(三塔基看春草)⁷

湖の中の三塔寺の基底は、湖面の下の一尺ばかりの浅いところにある。春の時には草が平湖に伸びている。緑の色が波の中に浮かび動く。水を浴びる鷺や、よく狎れた鴝が飛び舞い、よく自適している。一望するこの光景は、平生からのわたしの思いに深くかなっている。安らかに対面して、それを親しげに見つめることが心地よい。それで、古詩に「草が伸びて平湖に白鷺が飛ぶ」とあるのを思い出し、その幽賞のおもむきを浅からず自得した。

8 初陽台に春の樹を望む。(初陽台望春樹)⁸

西湖は三方を山がめぐり、東は城市となつている。春になれば樹木の色は新しくなつて、こんもりと茂つてくる。台に登って四方を眺めれば、浅く深く青緑の色彩がそこにあらわれ、高く低く入り交じつて各方面に出ている。あるいはむくむくと動いてもやを浮かべ、あるいは細くなよなよとして雨をおびている。あるいは山林にむらがり生え、あるいは楼閣におおい映る。あるいは日に向かつて榮えようとし、あるいは水に臨んで緑の色を漂わせる。こ

の奥深い静かな風景は心になつてゐる。自然に胸の中には生き生きとした思いが生じる。目を凝らすと(景色が)人の気持ちをくすぐる。水と雲と春の樹木への思いをさらにかき立てるのだ。

9 山満楼にて柳を見る。(山満楼観柳)⁹⁾

蘇堤の跨虹橋から東に数歩のところに、わたしは小さな建物を築いた。湖に対して南に向いている。山満楼と名付けた。わたしはここに来るたびに、楼閣の上に鳥のように巣ごもりして、欄干によりかかつて蘇堤を楽しむ。蘇堤は楼のひさしと接するように見える。

堤の上の柳は、正月上旬より鶯鳥の雛のようなやわらかい黄緑色をして、二月には鴨のような(あざやかな)緑色でなまめかしく揺れている。心引かれて見ていると、その色彩はもともと人の気持ちを乱す。

だから詩には、「たちまちに道ばたの楊柳を見る」思いとある。また霧を切り、煙を横たえ、ほのかに多くあるかのように見え、風に傾いて雨をさえぎり、長い堤を潇洒なものにする。新緑や日陰の中の姿を愛好すれば、ついには愁いを生み、恨みを発する。風流の情趣はことごとく楼の中に入り、春の色彩があわただしく、わたしの衣のたもとに授けられる。

柔らかい柳の枝が風に吹かれて、踊る足のようにゆらゆらと動き、(柳絮が)雪のように舞い、花のように飛び、上も下も風に従う。まるで絮^{わた}が野原一面に浮かび、妓女の楼閣をめぐり、僧の宿舎にひるがえつてぶつかるようだ。点々と酒屋の看板の旗と共にゆったりと飛び上がり、ときれときれに燕や鶯を追って飛び舞う。(そして)泥に汚れ水に流れる。

これをどうしてただ詩の題材だけしておくことができようか。目に見える形のあるものが幻影であることを知るためには、まさに風の中の柳絮を見ればよい。だから、わたしの別荘の額は「浮生燕壘」(はかない燕のすみか)

と題する。

10 蘇堤に桃の花を見る。(蘇堤看桃花)¹⁰

蘇堤の六つの橋の桃の花を人は争って賞翫する。その奥ゆかしいおもむきはいくつもあつて、いまだそのすべてを愛で尽くし得てはいない。桃の花の絶妙な景観には六つの趣向がある。

その一つは、明け方のもやの中で初めて花開くことにある。霞に紅の影を浮かべ、かすかな露がうすくかかる。その姿の瀟洒なることは、あたかも美人が朝起き出して、なまめかしくも弱々しく新たに化粧するかのようだ。

その二つは、明月の光に花が浮かぶことだ。影にはかぐわしい霧を籠め、その様子はあでやかに笑っているようだ。夜の姿の芳潤なることは、あたかも美人が月の下を歩くようで、物静かなおもむきがある。

その三つは、夕陽が山の端にかかり、紅の影に花がつややかに輝くことだ。春たけなわにして力なく、その美しく物事に堪えられない様子は、あたかも美人がほろ酔い加減で、恥ずかしがつてぐずぐずしているようだ。

その四つは、細かな雨が花を湿らせることだ。化粧した姿は赤い紅がさされ、新しくけがれない花が濡れそぼつ。色が変わり、水煙に潤う様子は、あたかも美人が湯上がりしたばかりで、暖かくつややかになり、なめらかでとろけるようだ。

その五つは、庭で高くかがり火をたき、酒をとつて花を見れば、花びらが光ってまるで薄絹のようだ。美しさを競い、色をもてあそぶ様子は、あたかも美人が夜の化粧をして、あでやかにゆったりとしているようだ。

その六つは、花の季節がまさにさかりを過ぎようとするところだ。残りの花が散り落ち、枝を離れようとしてまだ落ちず、なかばは落ち、なかばは留まっている。ここにかねてより、風神が無情にも高い所からたちまち吹き起り、無数の残りの花びらが入り乱れて飛び散り、あるいは、顔に当たつて人に挑みかかったり、あるいは、酒樽の中に

浮かんで、酒席に花を添える。心はうっとりとしてもさわがしい。あたかも美人が病んで弱り、化粧した顔の美しさも減ったようである。

これらの六つは、ただ、まことに味わうものだけが会得するのである。また、香りのある草が春を留めるように、緑の布団と重なりあった錦の上でわたしは酔って眠り、地に坐って高声に所懐を詠じる。花びらが散らばって衣を満たせば、残りの香りがさかんに鼻にただよい、夢で花神と手を取り合って、「巫山の雲雨」の思いを遂げる。美しい雲が飛び来たり、奥深い飲びが流れ広がる。この楽しみの何と深遠なることよ。

11 西冷橋で落花を楽しむ。(西冷橋「玩落花」)¹¹

三月の桃の花は、蘇堤で花弁を落とす、それが風によってただよい、水の流れにのって周回する。ただよったその軌跡の多くが西冷橋のほとりに集まる。散った花弁は、玉が砕けたようで香りはすがすがしく、赤い色が片々と残っているのは、詩人に対面して泣き別れる様子に似ている。おとこらしく別れの杯を酌み交わそう。そして、「渭城の朝雨」の句を高声に詠おうではないか。

12 天然閣の上で雨を見る。(天然閣上看雨)¹²

よい雨はしきりに降って、すぐに始まりすぐにやむ。山の頂きにはもやがかかっていたちまちまに青い山肌を隠し、樹木の間には雲気がわきあがりたちまち遠い山をぼやかす。細い糸筋がはるかな空から飛び舞って、清らかに輝いてひるがえること限りがない。

しばらくして、霞は紅に染まって水面にうつり、弱い日差しが西に傾く。連なった山々は、途切れ途切れに煙りを吐き出し、林の樹木は連日の雨でぼんやりと見えない。残りの雲と飛ぶ鳥は、眺望の中に溶け合っただんやりと

する。水の色や山の光は四方に照らされてひっそりとすがすがしい。声を長くして詩を吟じ、楼閣によりかかり高く歌って杯を浮かべる。

(これを見て) わかったことがある。天気の変化は速やかで測りがたく、降ったり晴れたりも予想がたい。世相も春雨のようなもので、変わりやすく人を翻弄する。目の前を通り過ぎるのは、すべて鏡に映った花のようなものであるから、天眼をもって看破すべきなのだ。

夏時幽賞十二条

13 蘇堤に新緑を見る。(蘇堤看新緑)¹³

三月中旬に堤の上の桃や柳の新葉は、うっそうとして緑陰をなし、浅い緑色やつややかな青色がもやに籠められて水気を帯びる。上下を一望すれば、青い雲が空を覆い、寂しげな静けさが人を包み、緑は衣の袂にしみこむ。落花は地にあつて、こまたに歩きながら赤い花卉を踏み、恍惚としてかぐわしい霞の中に入れば、もう、この身の他に更に俗世があるとは思えない。

心を許しあえる友と歓談して、杯を持ち一句を求め、橋の近くに席をとって景物をめ、時が立てば席を前に移す。もし詩ができなければ、その罰として、あの金谷園の罰杯の数だけ飲んでいただく。

14 東郊で蚕山を楽しむ。(東郊玩蚕山)¹⁴

初めてできた蚕箔の中の白い繭は、玉が積み重なった銀の敷物のようである。上下にむらがつて、糸はつばみのような繭を連ねる。まるで高い雪山に向かえば寒気を感じ、水の山が太陽の下で輝くようだ。

その季節になると、村の翁はめでたいと言い、隣家の主婦は互いに迎えあい、村々では太鼓を打ち、神に感謝して

お札祭をする。糸繰り車を繰り、繭玉を煮る。うぐいすは機織りをうながして柳の外で梭の音のように鳴き、かつこうは耕作をうながして桑の間で雨を呼ぶように鳴く。

清和節のおだやかな風の日に春の服ができあがった。歌を詠い、郊外に遊び、もっぱら野菜の汁物と麦飯を腹一杯食べる。そこで王建の詩を思い出した。「すでに村で機織りの作業がせき立てられている。出来上がったものは、誰が着るのだろうか」と。この句を見るに、絹の織物を身にまとう時はこうした農民の辛苦を思わずにいられない。

15 三生石で月を談じる。(三生石談月)¹⁵

中天竺山の後ろの山には鼎のように三つに分かれた石があり、どっしりと動かないから坐ることができる。伝えるところでは、僧円沢が生まれ変わったことと関わりのある遺跡だという。山は人跡に遠く景色は幽邃で、雲が深く静かな境地である。松が茂り木が青々として太陽の光をさえぎり空を覆う。これを鑑賞する人はまれだ。

炎天の日の月の夜に泉水でお茶を煮て、禪僧や詩友と席を分かち合い、あい対して句を求め、歌を続け、禪を談じて偈を説く。空いっぱい一輪の月がのぼり、露にうるおって清らかな光を放つ。四方の野原にはそよ風がわたり、樹木が涼しげな影をおとす。

なんとまるで人は氷壺(月のこと)の中にいるようではないか。ただちに玉殿で「空」を語りたくなる。静まりかえった岩谷の境界、これこそ仙人の都であり、もつとも幽賞に優れた場所だ。たちまち山の頂に鶴の鳴くのを聞く。溪谷の上には雲がわき、そのままわたしを乗せて仙境に昇ろうとする。俗塵にまみれた気持ちは静かに氷のようにとける。朝になってここを去れば、またそのままげに満ちた欲望の世界に生まれてしまうことを恐れるのだ。

16 飛来洞で避暑する。(飛来洞避暑)¹⁶

靈鷲山のふもとの岩洞はあざやかで美しい。周囲は何もなく広々としていて、これを指して西域から飛来した岩石だという。空気は涼しく、石は冷ややかで、小径に入れば寒気に包まれる。洞の中のけわしい所は高くて広く、堂のようである。狭いところは正方形の枳形で部屋のようなものである。どちらも人が通ることができ、頭がぶつかることもない。三伏の頃の極暑は人をいぶし、肌をやき骨をあぶるが、ここに坐れば、襟を開き髪を散らして、酒杯をとり大きな声で歌う。川の水音が溪谷に響き、清らかで涼しくわだかまりのないさっぱりとした気持ちになって、世間では今何月なのかわからなくなる。(夏ではあるが)わたしの葛を織ったあらい服ではもう秋のような寒さには耐えられない。はじめてここに入ればからだが涼しくなり、さらに入れば心が涼しくなり、深く入れば毛も骨も涼しくなる。俗世間の人は(欲望という)暑さにまみれて、焦げてとけてしまいうになり、氷や雪を食べてもその暑さはおさまらない。しかし、(ここはまるで)嚴冬が続いているかのようにだ。(欲望の暑さに苦しんでいるような者には)この清涼の樂園を教えてはならない。

17 壓堤橋の夜の宿り。(壓堤橋夜宿)¹⁷

橋は湖水の中に位置している。その下には紅白の蓮の花が植えられている。その広さは数畝にわたり、夏の頃にはその清らかな香りがさかんにおこって人を襲う。霞がただよい、雲は彩り、雨をおびて風をそばだてる。芳しい花は四方の山の色にこもごも映えている。

舟を携えて席をしつらえ、舟の中に寄りかかってみれば、月の光と蓮の香りが酒にしみこみ、露が衣を潤す。よるこんで(白い蓮の花と)対面して言葉を忘れる。まるでこの清らかな友と足がふれるほど親しく過(こ)すようである。真夜中に清浄な夢を見れば、このからだは盧山の白蓮社に入ったかのようにだ。赤い蓮に親しみ、ふすまや枕をともにして、なれ親しむのと比べて如何であろうか。さらに願わくは、後には君といっしょにずっと極楽浄土に住した

いものだ。

18 湖心亭で蓴菜じゆんさいを採る。(湖心亭採蓴)¹⁸

以前からこのように聞いていた。蓴菜は会稽の湘湖に生えていると。そこで、初夏になって蓴菜が食べたくなると、いつもそこに行つて採つて食べた。今では西湖の三塔の基底のかたわらに蓴菜が生えており、量も多く味もうまい。菱の実の小さいものは俗に野菱と言うが、これもまたそこに生えている。夏の日に割つて食べると新鮮でうまく、普通のものとは違う。その味わいを知っている人はまれである。わたしはいつも蓴菜を採り菱の実をむいて、田舎のおくりものとする。

これはまことに月の光に映える金色の波のように見え、飲めば長生きするという道家の仙薬で、青い荻の味わいがある。どうして、世間普通の子羊の煮物や兎の炙り物などと、そのかくわしい香りが比較になろうか。供するのは水菜であり、すするのは松の濁り酒だ。「思蓴の詩」を詠じ、「採菱の曲」を歌う。さらに、鳴鳴と鳴る牧笛の音と漁舟の櫓のきしる音とがあい答える。わたしが思わず走りだすと、たちまち両脇に涼風が吹き通つた。かの脂ぎつた肉を飽食するような輩は、我々の質素で淡泊な味わいを笑うがよい。

19 湖晴れて水面に流れる虹を見る。(湖晴視水面流虹)¹⁹

湖や山にひとしきり降る雨、夕陽に照らされて燃えるような雲。山のもやがさかにわき上がり、林はみどりの水を帯びる。陽光を浴びて鴟や鷺が争つて飛ぶ。蓮の花の上を吹く風がしきりにさわやかに袂をはらう。突然長い虹が空に立って、五色に燃え上がる炎の影が湖面に落ちた。光の色彩が浮きあがり降りそそぐ。たちまち、驚いたみずちが湖から飛び上がったように上下にゆらゆらして、空と水は互いに映えている。かがやく稲妻が流れを絶ち、

太陽を射て霞をむらす。まるで（虹が）夕陽の美しさをも奪うような夕暮れである。あたりの晚景にたえず静かに眺めると、高く遠く、思わず胸の中の身についた習慣で、水と空の気をいっしょに吞吐したいと思った。これはあの豊城の伏剣が、時には（わたしのような）世を避ける隠者のために、ひとたび、あらたまのような奥深い（空の）色を切り裂いたものであろうか。

20山の晩に軽雷が雨を断つを聞く。（山晚聴軽雷断雨）²⁰

晩に山の楼閣に枕を置いて涼む。酔って臥し初めて満たされた。欄干に寄りかかって長く朗詠し、（稲妻が）さわかやかに空を開くのに、ひとみを凝らす。

その時、聞こえてきた。南山の南でさかんに雷が鳴り響いている。樹の梢や家のすみに居る鳩は、新たに晴れることを快しとして、その婦を呼んで鳴く声が「ぼーぼー」と聞こえる。雲は残った雨を含み、なおいくつかの雨粒をゆらゆらと落とす。西の壁には月の影が映り、その影は湖面の波にも落ちて揺れただろう。

四方の山は静寂として、どっしりと坐る人の心も閑かであり、にわかには晩鐘を聞けばいっぺんに俗耳が清らくなる。漁師のともしびが無数に連なって北の方からやってくる。それもまた短い間の情趣深い光景だ。眼に触れるものは迷いのもつであり、心に触れるものは奥深いところで一致している。そうすれば、すぐに物質にとらわれた景勝を超えることができる。

21露がついているうちに蓮の実を割り蓮根を洗う。（乗露剖蓮雪藕）²¹

蓮の実の味がおいしいのはさわやかな早朝である。水気が夜の間に生じて、この時まさにいっぴいになる。もし太陽が出て露が乾けば鮮烈なおいしさは既に半減する。

その夜は岳王祠のかたわらに宿る。ここは湖の蓮がもつとも多いところだ。明け方に蓮を百房も割って飽食して味わいに満たされる。蓮根は水から出したばかりのものをよしとする。(蓮の葉の)緑色が美しい。西施を抱くかのように西湖を眺めると、わたしの「中山の久渴」が癒される。うまいのも当然であろう。口中の味わいのなんと甘いことだろう。いわんや蓮の徳は、その中を穴が通り外はまっすぐなものである。蓮根は清らかであり汚いものだけがすことはできない。これはまさに隠者の平生の志にかなうものだ。一日としてこの美味を食べずにいられようか。

22空亭で月に対座して琴を鳴らす。(空亭坐月鳴琴)²²

夏の日に山の中のあずまやで月に対座する。暑気は西に沈み、南からのさわやかな風がそよそよと吹いてきて、涼しさが生じる。目をこらせば、遙かなる山は鬱蒼ともりあがり、氷の鏡のような両湖はほのかにたたずんでいる。

どこからか鐘や磬の音が聞こえてきた。琴を抱いて月に向かって弾じれば、その響きは流れる雲をとどめる。高く広く「秋鴻出塞」の曲をかなで、清らかに幽玄に「石上流泉」の曲をかなでる。「風雷引」の曲は炎暑をけちらし、「嚴寒遊」の曲は、まったく清涼な気分にあふわしい。

なんと楽しいことか、この「山居吟」は。なんと悲しいことか、この「楚些曲」は。軽やかに指先からつむぎだされる「梅花」の曲は、人間世界の煩わしさや憤りを取り去ってくれる。ああ、どうして、陶淵明の無絃の音によって、俗塵の世に鐘子期の聴感を得られようか。音を正すことによって「絶響」(風流の余韻)となすべきなのだ。

23湖上に風雨がくるのを見る。(観湖上風雨欲来)²³

山の楼閣では五月六月の間は、風が吹くと寒くなり谷間の雲が湧き上がろうとする。山の色は急にくもったり晴れたりする。湖水の光も輝いたりかげったりする。黒雲が太陽を隠して段々と暗くなる。雲が飛ぶように流れるので、

晴れたりくもったりするのがとても速い。この光景を静かに味わっていると腹が減ったことも忘れてしまう。

しばらくして、風は谷々に叫び、雨は両山の間を横ぎる。驚いた水が波をわきたて、湖面の水煙は墨をまきちらしたようである。これを見れば、心は飛び精神が動く。まことに一つの特異な景観であろう。

時には龍が現れる。わたしはかつてこの目で龍の体を見た。わずかに数尺が現れ、背中は青色で腹は玉のような白さがひらめく。強く体をまがりくねらせ、雲をわき起こして雨をまきこみ、湖水を勢いよく跳ねまわって奮い立つ様子は、人間が立ち上がったようである。波のしぶきが滝のように吹き出し、下から上にのぼり、その速いことにおどろく。(龍が)大波をわき起こし、時がたつとようやく静かになる。これに対座すれば、水と空が一つに入り交じり、恍惚として広い宇宙に坐っているようで、空中の楼閣は飛び動き、自分がどこにいるのかもわからなくなる。それで思うことは、太古の世界の始まりは簡単で素朴であって、華やかなものではなかった。これがまさに雨の中の世界なのである。一切の生滅がともと空であることを知る必要がある。どうしてあなたは、このような気持ちをかたく保って、無の世界におもむき解脱しないのであろうか。

24山の小径を歩いて野の花や鳥を見る。(歩山径野花幽鳥)²⁴

山は深いほど、奥深い場所に夏の味わいがすこぶる多い。春の末から夏の初めにかけて歩いて山の林に入れば、松や竹がかわるがわるあらわれ、遠望すればまがりくねった小径が奥深いところへとつながっていく。

野の花はかすかに香りを放っており、その匂いはさっぱりとして、梅檀や麝香のような濃厚なものではない。山の鳥はなごやかに舌を嚙り、その清らかな響きの閑雅なることは、笙簧の音のような技巧的なものではない。これらみな造化の神のはからいで、目を楽しませ心を悦ばせるものだ。静かに鑑賞して、いやになる時がない。時に琴を抱き、松の木陰の石の上で一つ二つ雅な調子をつま弾くと、(自分は)静かに景色と一体となって画中の人物となる。

遠く耳をすませば、山村の茅屋のとなりの鶏の鳴き声や、木を伐採する、ちようちようという音や、木こりの歌がこれに答えるのが聞こえる。丘を越えて谷を尋ねて、さらに俗世間の外へ何層も脱出する。この景観には競うものもなく、争うものもない。足がおもむくところ、どこもわたしの宿でないところがあるか。またどうして、俗塵の悪しき世界とあれこれつまらぬことを比較する必要があるか。

*1 幽賞―奥深いところにあるものを味わうこと。李白「春夜宴桃李園序」に「幽賞未已、高談輒清」とある(『古文真宝』上)。孤山―西湖の中にある島。宋代に林逋がかくれ住んだ所。梅花の名所。林逋ゆかりの放鶴亭などがある。『夢尋』巻三「孤山」参照。逋老人―北宋の詩人林逋、諡は和靖(九六七―一〇二八)。孤山に住み、生涯仕えなかった。孫中貴―万暦の頃の司礼太監である孫東瀛のこと。巨費を投じて西湖の名勝を補修した。中貴は宦官のこと。玄圃―崑崙山の上にあるという仙人の居所。羅浮―広東省にある山の名。西湖にもゆかりのある葛洪が仙術を修得したところ。山の麓は梅の名所として名高い。疎影横斜―まばらで斜めに地をはう望ましい梅の姿の形容。

*2 八卦田―西湖の南、鳳凰山の西南に現在もあり、綺麗な八角形の田である。籍田―天子が祖先に供える米を、みずから耕作する田地。またそれを耕作する儀式。八卦―周易で陰陽の交を組み合わせた八つの形象。自然界・人事界百般の現象を象徴する。河図洛書―河図は伏羲の時、黄河から出た龍馬の背に現れた図で易の卦のもととなった。洛書は禹の時、洛水から出た神亀の背にあった文字で、書経の洪範編のもととなった。

*3 虎跑泉―唐元和十四年(八一九)創建の定慧寺にある泉。開山性空法師が水の便に苦心していたとき、不思議な虎が現れ、地をたたくと泉が湧いたという。名水として名高い。『夢尋』巻五「虎跑泉」参照。二つの山―北高峰と南高峰。「双峰挿雲」は西湖十景の一つ。龍井―南高峰のふもとにある。茶葉の産地として現在でも著名。龍井寺という寺がある。『夢尋』巻四「龍井」参照。

*4 保叔塔―西湖の北岸にある高さ六十三丈の塔。宋太平興国元年(九七六)、呉越王俶の創建。この由来からすると保叔塔

- が正しいのだろう。『夢尋』巻一「保俶塔」参照。
- *5 西溪―『遊覧志』巻十によれば、靈隱寺の西に粟山があり、さらにその嶺を過ぎると西溪であるという。『夢尋』巻五「西谿」によれば、人家まねな桃源郷で、丈の短い梅が好事家に人気を博しているという。
- *6 東城―臨安城の東ということであろうか。具体的には未詳。頃―面積の単位。一頃は百畝。
- *7 三塔―『遊覧志』巻二には「湖中旧有三塔湖心寺並廢」とあり、嘉靖年間にはなくなっていたようである。さらに続けて「相伝湖中有三潭、深不可測、西湖十景所謂三潭印月者是也」とある。現代の旅遊図では、湖心亭と三潭印月は離れている。明末の崇禎五年(一六三二)、張岱は湖心亭にて雪見をしたという。『夢尋』巻三「湖心亭」参照。古詩―南宋の徐元杰(げつ)の七言絶句「花開紅樹乱鶯啼、草長平湖白鷺飛、風物晴和人意好、夕陽簫鼓幾船歸」(南宋、劉克莊編『千家詩』巻三湖上所収)であろう。平湖―西湖十景の一つに「平湖秋月」があり、現代の旅遊図では孤山のあたりに記されている。
- *8 初陽台―葛嶺にある高台。『遊覧志』巻八に「在山嶺、葛仙翁修真時、吸日月精華於此」とあり、葛洪の遺跡である。現在の旅遊図にもある。初陽は朝日のこと。
- *9 蘇堤―北宋の政治家、詩人の蘇軾(蘇東坡)が、西湖を浚渫した泥で建造したという堤。全長二、八キロ。西湖の西側を南北に縦断する長大なもの。「蘇堤春曉」は西湖十景の一つ。『夢尋』巻三「蘇公堤」参照。跨虹橋―蘇堤にかかる六つの石橋のうちの第六橋。もともと北にあり、西湖十景の一つ「曲院風荷」や孤山にも近い。詩には：―王昌齡の「閨怨」と題する七言絶句「閨中少婦不知愁、春日凝粧上翠樓、忽見陌頭楊柳色、悔教夫婿覓封侯」(『唐詩訓解』巻七)の一句。踊る足のように：―原文は「三眠舞足」とある。三眠柳とは漢の園中にあった柳で、人の形に似て、一日に三度倒れ三度起きるといふ(『事文類聚後集』二二二)。
- *10 蘇堤―注9参照。現在も柳や桃が植えられているという。風神―原文「封家姨」(『合璧事類』参照)。巫山の雲雨―楚の懷王が昼寝をして巫山の神女に遇った夢を見た故事(宋玉「高唐賦」、『文選』巻四所収)。これより男女の情事をいう。
- *11 西冷橋―『遊覧志』巻二に「一名西林橋、又名西陵橋、從此可往北山者」とあり、孤山と対岸を結ぶ橋。『夢尋』巻一「西冷橋」や巻三「蘇小小墓」によれば、橋の近くに錢塘の名妓蘇小小の墓があったという。現在も石橋があり、付近に秋瑾の墓がある。蘇堤―注9参照。渭城の朝雨―王維の「送元二使安西」と題する七言絶句「渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新、勸君更盡一盃酒、西出陽關無故人」(『三体詩』巻上)の一句。

- *12 天然閣―西湖の北、宝石山にあつた崇寿禅寺の付近にあつた天然図画閣のことであろう(『遊覧志』卷八参照)。杯―原文「浮白」(『説苑』卷一一「魏文侯」参照)。
- *13 蘇堤―注9参照。金谷園の罰杯―原文「金谷酒數」。晋の石崇が金谷の別荘で宴会を開き、詩の作れない客には罰として酒三杯を飲ませたという故事をふまえる(石崇『金谷詩叙』に「罰酒三斗」とある。『古詩紀』所引「世説新語」注)。
- *14 蚕箔―養蚕に使う「まぶし」のことか。蚕にまゆを作らせるための葦でできたすのこ。王建―中唐の詩人。韓愈などと親しく交わった。民衆の生活に取材した作品を作る。『王建詩集』九卷がある。王建の詩―原文「已聞隣里催織作、去与誰人身上着」。『古今事文類聚前集』卷三六所収の王建の「蚕箔詞」には、「已聞郷里催織作、去与誰人身上着」と見える。
- *15 三生石―『遊覧志』卷一や『夢尋』卷二「三生石」によれば、下天竺寺の後ろにあるという。現在、下天竺寺は法鏡寺という尼寺になっているという。三生石も現存する。僧円沢―唐代の洛陽惠林寺の僧侶。寺に寄寓する李源に転生の奇瑞をみせる。その舞台となつたのが、西湖の下天竺寺三生石の由来で、蘇軾の『僧円沢伝』に詳しい(『東坡全集』三九所収)。
- *16 飞来洞―西湖の西にある飞来峯の洞穴であろう。張岱『夢尋』卷二「飞来峯」所引の袁宏道「飞来峯小記」には「前後大小洞四五」とある。張岱も袁宏道も、元僧楊連真伽により彫られたという奇怪な彫像について批判的に記すが、高濂は例によってそうしたことにはまったく言及しない。靈鷲山―『遊覧志』卷一一に「靈鷲峯即飞来峯之別名也」とある。東晋の初めに印度の高僧慧理が登つたという。海拔一六八米。三伏―夏の極暑の期間。
- *17 壓堤橋―蘇堤の第四橋。『遊覧志』卷二によると、この橋の近くに賈似道が建てた崇真道院(俗称施水庵)や、水仙王廟(亦名龍王祠)があるという。盧山の白蓮社―東晋の慧遠が四〇二年に盧山の東林寺ではじめた念佛修行の結社。赤い蓮に親しみ―妓女と親しむことの譬喩を含むか。
- *18 蓴菜―スイレン科の多年生水草。地下茎は泥中を伸び、節ごとに根を下ろす。茎と葉の背面には寒天様の粘液を分泌し、新葉には特に多い。夏、水面に紫紅色の花を開く。若芽・若葉は食用とされる。会稽―現在の浙江省紹興市。夏の禹王が諸侯と会した地という。湘湖―紹興市付近にある湖水。三塔―注7参照。菱―ヒシ科の一年生水草。根は泥中にある。夏、白色四弁の花を開き、鋭い角状の突起のある堅果を結ぶ。種子は食用とする。思蓴の詩―『晋書』九二「列伝」六二の張翰伝に、秋風が吹くと故郷である呉の菰菜や蓴菜のあつもの、鱸魚のなますを思い出すという話があり、これをふまえるか。採菱の歌―梁府清商曲辞、江南弄の名。宋の鮑照作。なお、梁の武帝が西曲を改めてつくつたという「採菱曲」もある。

*19 夕陽―原文「頽丸」。頽陽、すなわち夕陽のことか。吞吐―飲み込み吐き出すことであるが、大気を深呼吸する養生術の一つであろう。豊城の伏剣―予章の豊城の地に埋もれていた龍泉・太阿の二名剣が光を放って天に徹し、紫気が現れたという故事(『晋書』二六「列伝」六、張華伝)がある。

*20 南山―鐘の音が聞こえるという記述をふまえると、龍井の近くの南高峯ではなく、西湖の南、浄慈寺のある南屏山を指すか。「南屏晚鐘」は西湖十景の一つ。

*21 岳王祠―岳飛の廟。西湖の北にある。岳飛は南宋の武将。高宗に仕え「精忠岳飛」の旗を受けた。金軍を破り功績をたてたが宰相の秦檜に讒せられて獄死した。死後、鄂王と追封される。「遊覽志」巻九・「夢尋」巻一「岳王墳」参照。中山の久渴―中山の狄希が、飲めば千日酔える酒を造ったという噂を聞いて、酒好きの玄名石がそれをこいねがったという故事(二十巻本『搜神記』巻一九)をふまえるのであろう。その中を穴が通り…―周茂叔「愛蓮説」に、蓮について「中通外直」とする(『古文真宝』上)。

*22 空亭―誰もいないあずまや。両湖―西湖は蘇堤により、西湖と西裏湖に二分されており、この二つを指すか。秋鴻出塞―古琴曲「秋鴻」の一部か。明代の『神奇秘譜』に見えるという。飛翔する秋鴻に託して、身の不遇と高邁な心を表現するという。石上流泉―元の陶宗儀の『琴曲譜録』にこの曲名が見える。山水の精妙を表現するという。広寒遊―曲名。広寒とは月宮殿のこと。山居の吟―琴曲名。南宋の毛敏仲の作。山居する隠士を表現するという。『神奇秘譜』所収。楚些曲―些は「楚辞」の招魂の句尾に用いられる語助詞。梅花―「梅花引」という曲名がある。陶淵明―東晋の詩人。字を元亮、おくり名を靖節という。酒に酔うと絃のない琴を撫でていたことは、『宋書』「列伝」五三にある。鍾子期―春秋時代の楚の人。その死後、琴の名手伯牙は自分の琴の音を知ってくれた唯一の人である彼の死を嘆き、弦を断つてふたたび琴を弾じなかつたという故事(『呂氏春秋』「本味」)がある。絶響―替康が刑死する時、琴を弾じて、名曲広陵散も今は絶えるだろうと言つた故事。

*23 解脱―束縛から離れて自由になること。苦惱から解放されて絶対自由の境地に達すること。

*24 梅檀―香木の名。白檀の異称。麝香―ジャコウジカの麝香囊から製した黒褐色の粉末で、芳香が甚だ強く、たきもの薫物に用い、薬料としても使う。笙簧―笙しょうこうの笛の舌。